

国 語 問 題

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は 20 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙（マークシート）の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。
4. 解答は必ず国語解答用紙（マークシート）の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。

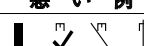
5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、

20

 と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の③にマークしてください。

例

良い例	悪い例
	

解答 番号	解					答					欄				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20															

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
- (3) 解答用紙へのマークはすべて H B のシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。
- (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
- (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
6. 国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。
7. 試験時間中に退場することはできません。
8. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
9. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

だれかに聴いてもらおうとひとが重い口を開くのは、何を言っても受け容れてもらえない、留保をつけずに、反論もせず、とにかく言葉を受けとってくれる、自分がそのままで受け容れてもらえる、そういう感触を確認できたときである。このとき、相手に見守られている、自分が相手の関心の宛て先になっているということが大きな力になる。関心をもつひと、じっと待ってくれるひとの前ではじめて、ひとは口を開くのである。西洋のひとたちが関心のことをインタレストと呼ぶことには^(ア)ガンチックがある。インタレストという語は、ラテン語の 'inter-esse'、つまり相互的な存在であるということ (inter-being) からきているのだ。

歯科医院でよく、絵本を読んでとせがんでいる幼児を見かける。お母さんが読みはじめても、子どもの気は余所^{よそ}へ行っている。読み終えたらすぐにもた「もう一回」とおねだりする。A 他の子どもがどんなオモチャをもっているか、どんな遊びをしているかが気になって、話はろくに

聴いていない。なのに何度も「読んで、読んで」とくり返す。ここでは、話の中身より、母親の声が自分のほうへ向いていることの確認が大事なだろう。物語の筋よりも、自分が母親に語りかけられているという状況、つまりは自分の存在⁽¹⁾がだれかの意識の宛て先になっていることが、子どもにとって何より重要なだろう。

「時間がないので子どもの話をじっくり聴いてあげられない」と言うひとがいる。でも聴くことは片手間でもできる。ここは仕事をする時間、ここは料理をする時間、ここは家族で団欒^{だんらん}の時間と区切らなくても、料理を作りながら、何かをしながら耳だけちよつとそちらに傾けて聴くということもできる。というかむしろ、ちゃんと聴いていないのかなというくらいの方が、話すほうも話しやすい。真剣に聴かないほうがきちんと聴ける。日々の会話では、気が抜けた雑談のなかから何かが生まれるなどということもよくある。だからといっていい加減に聴いていればいいというわけでもなく、このひとはいま自分のためにここにいてくれるという感触があればいい。あなたのために早く帰ってきた、ほんの少しだけでもここにいて、この時間はあなたのためにここにあると時間をプレゼントする。そういうことは、子どもは感じ取れる。そしてそういう関係さえあれば、子どもの口から言葉はおのずから漏れてくる。

聴くことのプロは、あえて聴かないことも聴くことのひとつとよく心得ている。臨床心理学者の河合隼雄^{はあ}さんは、かつて相手の口を開かせるコツとして、こんなことをスィショウ^(イ)していた。「ほう」とくり返すこと、河合さんの言葉で言えば「感心する才能」である。わたしはあなたに関心

があるという信号をくり返し送るということである。

接客業のプロは、受けとめること、認めることだけが聴くことでないことを熟知している。 **B** 憎まれ口を叩く、わざとつれなくする、思いとは逆のことを言う、聞こえていないふりをするなどして、相手を突き放す。あるいは、聞き流す、聴かなかったことにする、逸らす、とりあわないなどして、相手をはぐらかす。もちろんこんこんと諭したり説教したりすることもある。そんな緩急や押し引きをよく心得ている。

いずれにせよ、聴くときに大事なものは、最後までつきあうことだ。《時間をあげる》ということだ。語る／聴くという関係のなかでは、「ふれあい」よりも、ずれや齟齬、すれ違いのほうがケンザイ化してしまう。が、このぎすぎすした関係を何度も経験することこそが大切なのだ。こういう試行錯誤のくり返しの果てにしか、ほんとうの意味で、語る／聴くという関係は生まれてこない。語りは信頼を前提とするが、信頼は言葉の積み重ねのなかでしか生まれてこないからである。そういう言葉のやりとりにかける時間を、ひとびとはなぜか惜しむようになっていく。

聴くことにも専門家が生まれたというのは、ちょっと危うい状況である。ついこのあいだまでは、聴くプロがいない代わりに町のなかに聞き役がいた。ひとびとはたがいに自然に聞き役になりあっていた。いまは、たがいに他人の家のことには踏み込まないようになって、聞き役もいなくなった。だから聴くプロも登場してくるのだが、聴くプロがいるとひとはますます他人の話など聴かなくなる。子どもの鬱ぎをみずから聴く前に、すぐに「カウンセリング受けてみる？」と訊く。そういう悪循環がどんどん進行しているように見える。

言葉というのは不思議なもので、交わせば交わすほどたがいの違いが際立ってくる。たがいに理解しあうということ、相手のことをわかるということは、相手と同じ気持ちになることだと思っているひとが多い。しかしそれは理解ではなく合唱みたいなものであって、同じものを見ていても感じるものがこんなにも違うのかというふうに、違いを思い知らされることが、ほんとうの意味での理解ではないかと思う。

以前、友人の家族と会ったとき、母親が自分の息子を指さして「この子とは性が合いませんねん」と言った。このお母さんは素敵だと思った。ひとには言ってもわからないことがある、それを知ったうえでそれでもいっしょにいる。わからなくてもたがいの信頼が揺るがないことを肌で感じている……。性が合わなくてもいい、いやむしろ合わなくて当然なのだ。

「納得」という言葉がある。「納得」というのは不思議な心持ちで、「あなたの言うことはわかるけど、納得できない」と、わたしたちはしばしば口にする。逆に、「あなたの言っていることはわたしには肯うことはできないけれど、でも納得はできる」とか「事はそれで解決したわけではないけれど、納得はした」と口にすることもある。

このように、「納得」にはどうも、事態の理解、事態の解決には尽きないものが含まれているようだ。だから、わかってもらいたいと願って口を開いたひとが、「わかる、わかる」と相手にすら言葉が返されると、「そんなにかんたんにわかられてたまるか」と、逆に頑^{かたく}になるのだろう。

ある家庭裁判所でもしろうい話を聞いたことがある。離婚^(エ)のチョウウテイで、双方がそれぞれの言い分をぶつけ合った果てに「万策尽きた」「もうあきらめた」「いくら言ってももう無駄だ」と観念したとき、そのぎりぎりの決裂のときにこそ、ほんとうの話^{みち}しあいの途^{かす}が微かに開けることがあるというのだ。訴え合いのプロセス、交渉のプロセスが尽くされてはじめて開けてくる途がある、と。

言葉のぶつけ合いの果てに、相手方のなかにその相手（つまり、このわたし）の心根をうかがうような想像力もしくは関心がふと芽生えたことを察知したとき、そしてこの修羅場から降りずに、果てしなく苦しいこの同じ時間を共有してくれたことそのことにふと意識が及んだときに「納得」ということが起こるというわけだろう。その意味では、⁽⁵⁾「納得」は、事態の解決というより、その事態に自分とは違う立場からかわるひととの関係のあり方をめぐって生まれる心持ちなのだろう。

聴くというのも、話を聴くというより、話そうとして話しきれないその疼⁽⁶⁾き^{うず}を聴くということだ。そして聴き手の聴く姿勢を察知してはじめてひとは口を開く。そのときはもう、聴いてもらえるだけでいいのであって、理解は起こらなくていい。妙にわかられたら逆に腹が立つというものだ。

こうして一つ、たしかなが見えてくる。他者の理解とは、他者と一つの考えを共有する、あるいは他者と同じ気持ちになることではないということだ。**C**、苦しい問題が発生しているまさにその場所にも居合わせ、そこから逃げないということだ。

こういう交わりにおいて、言葉を果てしなく交わすなかで、同じ気持ちになるどころか、逆に両者の差異がさまざまな微細な点で際立ってくる。「ああ、このひとはこういうときこんなふうを感じ、こんなふうに惑うのか」と、細部において、ますます自分との違いを思い知ることになる。それが他者を理解することなのである。そして差異を思い知らされつつ、それでも相手をもっと理解しようとしてその場に居つづけること、そこにはじめてほんとうのコミュニケーション^(オ)が生まれるのではないかと思う。このことはもつと大きな社会的次元においても、つまり現代社会の多文化化^{マルチカルチュラル}のなかで起こるさまざまなカットウや衝突のなかでも、同じように言えるはずだ。

（鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい？——臨床哲学講座』より。出題にあたって本文を一部改変した）

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二字ずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) ① (イ) ② (ウ) ③ (エ) ④ (オ) ⑤

(解答例) ジュンカン

- ① 準 ② 循 ③ 純 ④ 潤 ⑤ 順 ⑥ 環 ⑦ 館 ⑧ 間 ⑨ 管 ⑩ 幹

答 ② ⑥

(ア) ガンチク

- ① 眼 ② 含 ③ 願 ④ 玩 ⑤ 頑 ⑥ 逐 ⑦ 築 ⑧ 蓄 ⑨ 竹 ⑩ 畜

(イ) スイシヨウ

- ① 推 ② 垂 ③ 粹 ④ 炊 ⑤ 衰 ⑥ 省 ⑦ 証 ⑧ 賞 ⑨ 祥 ⑩ 奨

(ウ) ケンザイ

- ① 験 ② 件 ③ 顕 ④ 賢 ⑤ 研 ⑥ 在 ⑦ 財 ⑧ 材 ⑨ 罪 ⑩ 剤

(エ) チヨウテイ

- ① 朝 ② 調 ③ 長 ④ 庁 ⑤ 兆 ⑥ 廷 ⑦ 停 ⑧ 呈 ⑨ 貞 ⑩ 訂

(オ) カットウ

- ① 渴 ② 克 ③ 活 ④ 葛 ⑤ 割 ⑥ 等 ⑦ 当 ⑧ 統 ⑨ 藤 ⑩ 倒

問二 空欄 A・B・C に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

6

- | | | | |
|---|--------|--------|-------|
| ① | A けれども | B そして | C 一方 |
| ② | A そのうえ | B そして | C 一方 |
| ③ | A けれども | B たとえば | C むしろ |
| ④ | A そのうえ | B たとえば | C むしろ |
| ⑤ | A けれども | B たとえば | C 一方 |

問三 傍線部(1)「自分の存在がだれかの意識の宛て先になっている」にあてはまる状況として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

7

- ① 話を聴かずおもちゃを気にしていることを心配してくれている。
- ② 自分の話に対して「ほう」と切り返して聴いてくれている。
- ③ 何度もおねだりすることによって相手が迷惑に感じている。
- ④ 自分と同じ気持ちになって、「わかる、わかる」と言ってくれている。

問四 傍線部(2)「聴くときに大事なものは、最後までつきあうことだ」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① 言葉のやりとりのなかで、気持ちの食い違いなどをくり返し経験することで、語る／聴くという関係のための信頼が築かれるため
- ② 接客のためには、聞こえていないふりをして相手を突き放したり、論じたりして、十分な時間をかけることが必要なため
- ③ 信頼し合うために語り合うことが必要で、そのためには言葉の積み重ねのなかで同じ気持ちになってもらうことが大切なため
- ④ 昔は町のなかでひとびとが自然に聞き役になりあっていたが、今は他人の家のことには踏み込みづらくなったため

問五 傍線部(3)「合唱みたいなもの」とはどのようなことか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① 言葉を交わせば交わすほどたがいの違いが際立ち、たがいの理解が進んでいくということ
- ② 同じものを見ていると感じることがこんなにも違うのかというふうに、違いを思い知らされること
- ③ それぞれの違いがあつたとしても、それが見えないように形だけ合わせているということ
- ④ たがいに言葉を交わしあうことによってリズムが生まれ、それぞれの違いを認識できるようになること

問六 筆者が傍線部(4)「このお母さんは素敵だなと思った」のはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- ① 母親が子どもとの違いが大きいことを受け入れた上で、確かな信頼関係を築いていることを感じたから
- ② 子が親に対して「性格が合わない」と言うのは良くないことなのに、この母親がそれをあえて許容していたから
- ③ 母親が子育てについての悩みを吐露したことに対し、正直なお母さんだと感じたから
- ④ 「この子とは性が合いませんねん」と言えるくらい仲の良い親子であることが明らかだったから

問七 傍線部(5)「〔納得〕」は、事態の解決というより、その事態に自分とは違う立場からかわるひととの関係のあり方をめぐって生まれる心持ちなのだろう」についての説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- ① 「納得」は、問題の解決によって得られる感情ではなく、自分とは異なる立場の人との関係の中で、相手への理解や関心、共に困難な状況に耐え抜いた経験を通して、同じ気持ちを持てるようになることである。
- ② 「納得」は、じっくりと話をして問題を解決することによって得られる感情であり、自分とは異なる立場の人との関係の中で、相手への理解や関心、そして共に困難な状況に耐え抜いた経験を通して生まれる、より深い心の状態である。
- ③ 「納得」は、単に問題が解決したから得られる感情ではなく、自分と同じ考えを持つ人たちとの理解や関心、そして協働する経験を通して生まれる、より深い心の状態である。
- ④ 「納得」は、問題の解決によって得られる感情ではなく、自分とは異なる立場の人との関係の中で、相手から自分への関心を察知したとき、そして困難な状況に向き合った経験を共有したことに気づいたとき生まれる心の状態である。

問八 傍線部(6)「疼きを聴く」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

12

- ① 双方がそれぞれの言い分をぶつけ合った果てに、これ以上の話し合いは無駄だと観念したときに出てくる言葉を聴くこと
- ② 「話そうとして話しきれない」状態そのものに耳を傾け、その場から逃げずに、相手が言葉を発するまでつきあうこと
- ③ 言葉のぶつけ合いの果てに、自分のなかにその相手の心根をうかがうような想像力や関心の芽生えを感じることに
- ④ 苦しい問題が発生しているまさにその場所にとどまり、そこから逃げずに相手との共通点を探すこと

問九 本文の内容と一致しないものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

13

- ① 人々がたがいに聞き役になることを避けるようになり、聴くことの専門家が登場したことによって、言葉を通した他人との関わりがますます少なくなるという悪循環が生まれたように思われる。
- ② 話をする側は、自分の話を受け容れてもらえると感じたときはじめて口を開くが、そのときに理解は必要ではなく、聴いてもらえることが重要である。
- ③ 真の理解とは、表面的に相手と同じ考えを持つことではなく、むしろ、言葉を交わすなかで浮かび上がるたがいの違いを認識し、受け容れるなかで生じる。
- ④ ほんとうのコミュニケーションは、苦しい問題が発生している場所から逃げずにとどまり、他者との差異が明らかになったときに、それを細部まで修正しようとすることから生まれる。

Ⅱ 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

その厩舎は、潮風をまともに受けていた。

島の山裾に建っている、わずか一頭の馬のための小屋でしかなかったけれど、神社への参詣人は、この前を通らなければ、本殿に入ることもケイダイから出ることもできなかった。馬は、「神馬」であった。

潮が退くと、島の砂浜にはいくつもの水溜りが残る。大きな水溜りでは、逃げおくれた小さな魚が厚い砂の壁に頭を打ちつけたが、明るい、澄んだ水の中の魚は、時々目玉と骨だけになって直進するように見えた。淡紅色の腸ひとつで **A** ようにも見えた。

連絡船は、日に幾度も陸地とこの島の間を往き来する。砂浜では、よく鳥の子が首をかしげていた。鳥の声を不吉のゼンチヨウと聞く人もいるが、もしそうなら、この島は年中忌日になってしまう。神社の祭の日も、若者の婚礼の日も、島はその啼き声で夜が明けた。

陸の少女がはじめてこの神馬を見かけた日、それは厩舎の中で、優しい大きな目を伏せるようにして、海に向ったままじっと佇んでいた。雪の前の空合のような毛色で、すっきりした鼻梁の両側には血管が強く浮いてい、時折思い出したように、上下の唇を静かに擦り合わせていた。鬣を振るでもなく、床を蹴るでもなく、まばたきもあまりに間遠だったので、少女は、この馬は本当に目が見えるのかしらと疑ったほどである。

厩舎には、海の側にだけ粗い格子がはめられている。 **a** その中央には、馬が楽に顔を出せるだけの隙間が拵えてあり、前に、高さ一メートルあまりの石の台があつて、神馬はそこで参詣人の与える餌を食べる仕組みになっていたが、その軀はいつでも人に見られていた。

最初の時、少女は、自分達のほかには誰もいない厩舎の前で、母親に、この馬は石鱗をつけて洗えばもっと白くなるのではないかとたずねた。母親は、なるかもしれないがならないかもしれない。生まれつきということもあるし……と言った。

少女は、練兵場で、茶色や黒の馬に混って鞭打たれながら砂埃をあげている白い馬でさえ、今見ているのよりはずっと白かったと思うのに、神社で飼われている馬がこれでは神様に対しても申し訳ないような気持だった。しかし、生まれつきかもしれないと言われてみて、はじめて自分の言ったことにどきりとした。

茶色の馬は何と呼ぶの？

少女はもじもじしながら、自分でも思いがけないことをたずねていた。

栗毛でしょうね。

母親はそう答えた。ただし、尻尾や鬣の色がちがうと、呼び方もまた変わるものらしいとつけ加えた。

黒い馬は？

青毛。

それならこの馬は白毛？

母親はしばらく考えていたが、

白毛とは言わないでしょう。やっぱり白馬かしら……

と
B。

二度目の時、厩舎の前にはちょっとした人ばかりがしていた。少女が近寄って見ると、最初の時と同じように海に向って大人しく佇んでいる神馬の前で、赤ら顔の中年の男が、和服の懷から大きな折り財布を取り出すところだった。

素焼の小皿に盛られた神馬の餌は、麦と人参の二種類であった。男はどちらも買った。そして髪に花飾をつけた幼女に人参の皿を与え、両手で後ろから抱き上げると、石の台の窪みに餌を移させた。馬は、その窪みを鼻先と唇で拭うようにしながら人参を口に移したが、食べ終るか終わらないうちに、突然大声に男が叫んだ。

お廻り！

あの優しい大きな目を、^{またた}瞬がゆっくり覆った。しばらくそうになっていた。再び瞬が開くと、神馬は頸を上下に振ってから、枯草の敷き詰められている床を踏んで、左手に静かに廻りはじめた。少女は目を瞠った。厩舎はあまり広くはなく、馬がその中を一巡するのにさほどの時間もかからなかったけれど、少女にはずい分長いドウテイに感じられた。

格子の隙間に白い顔が戻った時、中年の男は、今度は男の児を抱き上げて麦を移させた。馬は形よく開いた耳をびくびくさせながら、頸を深く傾けて石の台に顔を寄せて来た。額から鼻梁にかけての毛が、風に吹き分けられた薄の穂波のように、きれいに左右に分れている。少女は、この馬も、時には風を突いて広い草原を駆けたいだろうにと思った。以前写真で見た、明け方の草原を勢いよく駆けて行く一群の馬の遠い影のような姿は、少女にはいつのまにかもう、写真と実景との区別がつかないものになっていた。

ようやく麦を食べ終った頃、待ちかねたように男がまた叫んだ。神馬はいったん顔を起すと、鬣のもつれている頸をしっかり立てたまま、幾度か頭を左右に振った。それから目を伏せた。 **b**、男がいま一度、前よりも大きな声で叫ぶと、もう頭は振らず、そのまま頸を落して、前と同じ方向に廻りはじめた。

幼女が新しい人參をせがみ、男の児が次の麦を求めた。よし、よし。いくらでも買ってやるぞ。赤ら顔の男は、皿の数に生き甲斐を感じているらしかった。子供の声の弾みに、父親の実感をかみしめているらしかった。

オマワリ！

男の声に、子供達の声が重なった。神馬は鬣を振りながら廻っては食べ、食べては廻った。少女は、白い馬を見ているはずであった。神馬を見ているはずであった。けれども目ざめたまま不思議な生きものの夢をみているようだというのが少女の実感であった。

いつのまにか、少女は人だかりの外に押し出されていた。そうされていながらなお蹄の音を聞き、人声を聞いた。神様のお乗りになる馬だから、人間の言葉がちゃんとわかるの。いまに目がまわってぶっ倒れるぞ。食べるだけじゃあ運動不足になるからな。もういやだという時は頭を振るのね、賢いわ、この馬。違うよ、怒鳴られて、音におどろいて廻るんだよ……

少女はそうしているうちに、どういうわけか、自分が非常に悲しい気分になっていることに気づいた。あのように厩舎を廻っている馬にも、廻らせている男にも自分を見るといふ分別は、無論まだついていない。それで少女は、ただそれだけが手だてでもあるかのように、人々の後ろにいて、抛りどころのさだかでない悲しみを悲しんだ。誠実に悲しんだ。

三度目の時、神馬は臉を閉じたまま枯草の上に横たわっていた。前肢と後肢を行儀よく揃えて海の方に流している。時々身慄いして薄く臉を開いたが、つづきの眠りに帰るようにじきに閉じた。大きな軀が無防備になると、小さな軀以上にあどけなく見えることがある。横たわっている馬は、参詣人の呼びかけにも、命令にも少しも反応を示さないの、厩舎の前の人だかりはすぐに崩れたが、一時するとまた新しい人が寄った。

少女は、この馬は今日は病気かもしれないと思った。そう思って見ると、気のせいか息づかいがせわしそうに見えた。しかし、よくながめているうちに、病気ではなくて、ちょっと休んでいるのかもしれないと思うようになった。神馬にもお休みがあつていい。そうでなければ目がまわってしまふ。

更にまたその次に考えたのは、もしかするとあのようにして人に抗^{あらが}っているのかもしれないということだった。ただそれを少しも疑わないためには、この神馬の目が優し過ぎた。馬には、これまで一度も手を触れたことがないし、馬の後ろを通ってはいけなとお母さんにもよく注意されてきたけれど、あの目と同じようにわたしも優しければ、枯草の上に跪^{ひざまず}いて頬を撫^なでても、この馬は決して荒びはしないだろうと思った。

新しい人だかりが崩れ、足音がばらばらと本殿の方へ遠ざかっていった。少女はこの時も一緒の母親に、もう少しここに居て、と言った。母親はうなずいた。石の台には、人参が載せられたままになっている。その縁に止った烏が、馬の方を見、母親の方を見、していた。

不意に、前肢を引き寄せるようにして馬が起き上がった。尾で脇腹を打ち、前肢と後肢を片方ずつ交互に折り曲げたりしていたが、イセイよく身慄いすると、静かに石の台に近づいた。食欲をみせた。少女は人参を一皿求め、母親に背をつかまれたまま伸び上がるようにしてそれを石台に移した。

わたしの餌を食べている。その通りであつた。少女は、はじめてただの見物人ではなくなったことに満足した。窪みはすぐに空になった。
c 神馬は、声もかけられないのに、予定の行動のようにあの見馴^なれた左廻りをはじめたのである。少女は、まるで自分が、お廻り！ と叫びでもしたような恐さにうろたえながら母親と顔を見合せ、生きものの足どりを追った。

蹄は規則正しく床を踏んだ。神馬は例のように一巡すると、ほとんど機械的に石の台に顔を寄せ、空の窪みをこれもほとんど機械的に舐^なめると、再びまた床を踏んで廻り続けるのだった。満足感⁽³⁾は疾^とうに消え去っていた。ただ悲しいというのでもなく、ただ恐いというのでもなかった。少女は、神馬と一緒に居たこれまでのどの時よりも不仕合せになっている自分に気づいた。けれどもそれが唯^{ただ}ひとときの不仕合せなどと言えるものではなくて、人の生きのびる限りつづく気重さであり、後ろめたさであろうと気づくのは、まだずっと後のことであつた。

（竹西寛子『神馬』より。出題にあたって、本文を一部改変した）

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 14

(イ) 15

(ウ) 16

(エ) 17

(解答例) コウケン

- ① 高
- ② 貢
- ③ 工
- ④ 功
- ⑤ 幸
- ⑥ 猷
- ⑦ 権
- ⑧ 堅
- ⑨ 謙
- ⑩ 件

答 ② ⑥

(ア) ケイダイ

- ① 形
- ② 境
- ③ 京
- ④ 景
- ⑤ 経
- ⑥ 台
- ⑦ 大
- ⑧ 内
- ⑨ 第
- ⑩ 代

(イ) ゼンチヨウ

- ① 千
- ② 全
- ③ 善
- ④ 禅
- ⑤ 前
- ⑥ 重
- ⑦ 長
- ⑧ 超
- ⑨ 庁
- ⑩ 兆

(ウ) ドウテイ

- ① 道
- ② 堂
- ③ 同
- ④ 銅
- ⑤ 動
- ⑥ 体
- ⑦ 帝
- ⑧ 貞
- ⑨ 定
- ⑩ 程

(エ) イセイ

- ① 以
- ② 為
- ③ 意
- ④ 異
- ⑤ 威
- ⑥ 性
- ⑦ 生
- ⑧ 勢
- ⑨ 正
- ⑩ 聖

問二 空欄 A・B に入るものとして最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

A
18

B
19

A

- ① 水を飲む
- ② 水をさす
- ③ 水をすくう
- ④ 水をまく
- ⑤ 水を切る

B

- ① 言葉を返した
- ② 言葉を濁した
- ③ 言葉を弄ろうした
- ④ 言葉を放った
- ⑤ 言葉を尽くした

問三 空欄 a・b・c に入る接続詞の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

20

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|---------|
| ① | a | もつとも | b | しかし | c | すると |
| ② | a | けれども | b | すなわち | c | そして |
| ③ | a | しかし | b | だが | c | それでも |
| ④ | a | すなわち | b | しかし | c | にもかかわらず |
| ⑤ | a | もつとも | b | そして | c | しかし |

問四 傍線部(1)「自分の言ったことにどきりとした」とあるが、少女はなぜどきりとしたのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

21

- ① 神様に対しても申し訳ないような気持ちになったから
- ② 神馬のありのままの姿を認めていなかった自分に気づいたから
- ③ 神馬に石鹸をつけて洗うのは無理だということに気づいたから
- ④ 練兵場で砂埃をあげている白い馬と神馬を比べている自分に気づいたから

問五 傍線部(2)「不思議な生きもの」とあるが、どのような生きものか。その説明として、最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

22

- ① 嫌がる白い馬を急^せかして厩舎を廻らせている生きもの
- ② 明け方の草原を勢いよく駆けて行く一群の生きもの
- ③ 目玉と骨だけで勢いよく泳いでいる小さな生きもの
- ④ 餌を食べては人間の声に従わされて厩舎を廻る生きもの

問六 傍線部(3)「神馬と一緒に居たこれまでの時よりも不仕合せになっている」とあるが、この時少女はなぜそのように感じたのか。その理由を「わたしの餌を食べて左廻りをする神馬」という語句を用い、国語記述解答用紙に、四十字以上六十字以内(句読点を含む)で記述しなさい。

[illegible]

（この枠は下書き用です。別紙の国語記述解答用紙に記入のこと。）

問七 本文の内容に一致しないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

23

- ① 少女は中年の男が怒鳴って神馬を廻らせているのを見て悲しい気持ちになった。
- ② 少女は神馬も風を突いて広い草原を駆けたいだろうと思った。
- ③ 少女は神馬が餌を与えられて左廻りするのをもっと見たいと思っていた。
- ④ 神馬は参詣人が餌を与え、「お廻り」と叫んではじめて厩舎を廻るように訓練されていた。
- ⑤ 中年の男は二人の子供を喜ばせたくて神馬の餌を買い、「お廻り」と叫んだ。
- ⑥ 神馬の毛は雪の前の空合のような色だった。

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)～(4)のことわざの空欄に入る漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) ひょうたんから が出る。

- ① 蛇
- ② 玉
- ③ 駒
- ④ 手
- ⑤ 水

(2) 壁に耳あり障子に あり。

- ① 手
- ② 目
- ③ 鼻
- ④ 口
- ⑤ 顔

(3) 夕立は馬の を分ける。

- ① 背
- ② 首
- ③ 頭
- ④ 腹
- ⑤ 足

(4) 人の口に は立てられぬ。

- ① 壁
- ② 板
- ③ 窓
- ④ 扉
- ⑤ 戸

(1) 24

(2) 25

(3) 26

(4) 27

問二 次の(1)～(3)の四字熟語の空欄に入る漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 28

(2) 29

(3) 30

(1) 馬 東風

- ① 自 ② 耳 ③ 児 ④ 時 ⑤ 治

(2) 虚心 懷

- ① 淡 ② 单 ③ 丹 ④ 坦 ⑤ 端

(3) 勇猛 敢

- ① 課 ② 菓 ③ 果 ④ 科 ⑤ 加

問三 次の文のカタカナ部分にあてはまる漢字として最も適切なものを、①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

31

先日、友人と地域のお祭りに参加した際、花火をカンショウした。

- ① 勸賞 ② 観賞 ③ 観照 ④ 鑑賞 ⑤ 感傷

問四 次の(1)・(2)の故事成語の意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

32

(2)

33

(1) 人事を尽くして天命を待つ

- ① 努力はしたものの結果が伴わなかったのは、運命だから仕方ないと諦めるということ
- ② 全く努力はしなかったが、あとは運命に任せるだけだということ
- ③ 可能な限りの努力をして、その結果は運命に任せるということ
- ④ 可能な限りの努力をするだけでなく、良い結果が出るように天に祈ることが大切だということ
- ⑤ 努力をする必要などは一切なく、すべて運命に任せるということ

(2) 石が流れて木の葉が沈む

- ① 石が流れ、木の葉が沈んでゆく様を見ながら、自然の奥深さを感じることに
- ② 目的を果たすためには、様々な困難を乗り越えなければならないことに
- ③ 石は流され、葉っぱも水に沈むくらい水の流れが速く激しいことに
- ④ 不測の事態に対応するために、常に準備を怠らず、警戒しなければならないことに
- ⑤ 世の中には、物事が道理と逆になって、常識を覆すことがあることに